

<書評論文>

役割からの離脱

——現代社会におけるアイデンティティ形成の一側面——

Helen Rose Fuchs Ebaugh, *Becoming an EX:*

The Process of Role Exit.

(The University of Chicago Press, 1988)

水野英莉

はじめに

私達は誰しも、役割からの離脱を経験する。学校を卒業し学生という役割から社会人の役割へ、結婚して独身者から既婚者の役割へ、ある役割から他の役割への移行の際に生じる役割離脱の経験は、人生の間で何度でも生じる。これから紹介する『前歴—役割離脱の過程—』の著者であるヘレン・R・F・エバウは、家族役割からの離脱（夫、妻、親権のない母親）、職業役割からの離脱（修道女、医者、警官、教員、航空交通管制官、退職者）、宗教的あるいは政治的イデオロギー役割からの離脱、烙印を押された役割からの離脱（囚人、アルコール中毒患者）、そして性転換者へのインタビュー調査から、一般的な役割離脱過程の段階的モデルを描きだす。

エバウは、現在ヒューストン大学社会学部で教鞭を執っている。彼女は元修道女である。博士論文は『修道院を離れて—組織ジレンマの研究—』（1977）として出版されている。また、近著には、『消えゆく修道院の中の女性—アメリカにおけるカトリック教会の組織的衰退—』（1995）がある。エバウは、自らの経験を活かしてカトリック教会の調査を長年行ってきた。役割論に関心を抱いたきっかけは、1970年代にコロンビア大学でR・K・マートンに社会学を学んだことにある。その中で彼女は、従来言われてきたような役割取得や予期的社会化などの概念では捉えきれない感情や過程に注目するようになる。本書では、博士論文執筆の際に修道女に対して行われたインタビューの結果に加えて、

その後さまざまな前歴を持つ人びとに対して行ったインタビュー調査の知見をベースに、議論が展開されている。

本書では第一章で問題の定義がなされた後、第二章から第五章までの中で、離脱過程が段階順にまとめられている（図表参照）。第六章では本書の知見・意義が再確認され、エピローグでは本書の知見の応用可能性等について言及される。付録においては、サンプルの社会的特徴及び聞き取りインタビューの治療的効果（つまり調査が被調査者に与えた影響）について論じられている。

本稿では、本書の役割離脱過程の考察部分を重点的に紹介する。すなわち、本書の第二章から第五章に書かれている四段階の役割離脱過程に焦点を当てることとなる。この部分はインタビュー調査で集められた様々な離脱の事例から、段階的に過程がまとめられており、本書の核心部分である。本稿の構成は以下の通りである。第一節では、役割離脱研究および役割研究の中における本書の位置づけを行い、本書を取り上げる理由について述べる。第二節においては、役割離脱の過程の具体的な内容を紹介する。最終節においては、本書を特に自然史的研究という観点から取り上げ、その意義を検討し、本書の現代的意義をアイデンティティ形成の側面から考察する。

1. 役割離脱概念

役割離脱という用語は、もともとZ・S・ブラウが1972年のアメリカ社会学会において多血症の事例研究の中ではじめて使用した言葉である。ブラウはこの役割離脱の理論を提示するにあたって、老人という個別のデータから出発し、全てのタイプの離脱を含めて一般化しようとしており、分析の理論的枠組を提出した。しかしその後比較データでこれをフォローする研究は試みられなかった。社会学ではその他にも役割離脱に関連した研究（例えば家族論における離婚やカルト研究における脱会）がいくつかの領域で存在する。エバウはこれらの先行研究に対して、この領域には一般理論が欠如しているという。彼女は理論が生まれにくい傾向への批判を込めて、役割離脱の一般理論の概念化を含む基本的な問題の調査と提案を試みる。本書では完璧な理論を作ると言うよりも、むしろ役割離脱の過程と、役割離脱の概念化を含む変数を提示することを目指している。

役割研究全体においては、主に役割への参加や社会化に重点がおかれてきた。新しい役割への適応・不適応が主な関心事であった。しかしエバウはむしろ役割が変化する際に生じる出来事や経験、感情の動きに注目し、アイデンティティが生まれ変わっていく契機を当事者の語る経験を聞き取ることで詳細に描こうとしている。役割からの離脱は元の生活スタイルや人間関係、そして所属していた集団のアイデンティティを整理し、新しい役割に馴染むことの両方を含んでいる。役割からの離脱は様々な感情的な動きのなかで生じ、アイデンティティはその中で形成される。

私が本書を紹介する理由は、本書が明らかにした役割からの離脱の経験が、ごくありふれたことでありながらこれまであまり明らかにされてこなかったからである。そして自然史モデルを構築する研究が、一般の読者にとっても有益な結果を導き出す可能性が十分にありうることを主張したいからである。悲痛な思いを伴った役割離脱経験のある人は、本書を読むことでより広い見地から自らを位置づけ、異常であると思われたことがごく普通のことであることを知り、認知的にも情緒的にも自分を解放することができるのである。

2. 役割離脱の過程

本書でエバウは役割離脱を過程の中で明らかにしており、出来事の段階を踏んだ展開と連続性を注意深く見守っている。様々な前歴者のデータを集めるうち、ほとんどの人びとの経験の特徴として、過程の中に四つの主要な瞬間・段階が浮かび上がってきた。それは、「最初の疑問」、「代替役割を探す」、「ターニング・ポイント」、「役割離脱者アイデンティティの確立」の四段階である。役割離脱の過程には、11の性質が中心の変数として現れてきた。これらの変数は過程の性格を左右し、離脱の結末を導くのに影響を及ぼす。以下がその変数である。第一は、離脱が自発的であるかどうかを示す「自発性」。第二は、離脱する役割がその人の人生の中でどのような位置にあるかを示す「役割の中心性」。第三は、離脱が取り消し可能かどうかについての「取り消し可能性」。第四は、「離脱にかかる時間」。第五は、離脱が周囲からどの程度制限されているかどうかを示す「コントロールの程度」。第六は、離脱が「個人的離脱か集団的離脱か」について。第七は、「単数の役割からの離脱か複数の役割からの離脱か」。第八は、その離脱の「社会的望ましさ」。第九は、離脱が通過儀礼などとして制度化されているのかどうかを表す「制度化の程度」。第十は、離脱する人の離脱への「認識の程度」。第十一は、離脱がごく自然に連続して起きているのかどうかを示す「連続性」となる。この変数は離脱過程における四段階の局面に、繰り返し現れてくる。

2-1. 第一段階：最初の疑問

役割離脱過程の最初の段階はゆっくりと進行し、その間人びとはそれまで自明視していた状況を再解釈、再定義するようになる。自分の置かれた状況に対し、何となく疑問を持ち始めるのがこの段階である。

人びとが疑問を持ち始める状況は4つあり、第一は組織的変化、第二は仕事に対する燃え尽き、第三は人間関係における落胆と強烈な変化、第四は人生における特別な出来事である。これらの状況に共通するのは、現在の役割に参加する前あるいは参加した当初の期待と、実際にその役割を経験して

からの現実とのギャップを当事者が感じる点である。組織的变化について、修道院を例に挙げる。第二バチカン公会議以後、修道院はその厳格な組織の方針を開放路線へと大きく変更した。しかしながら修道女の一部は、その組織的变化についていくことができず、修道会から離脱した。自由路線が結果的に修道院を離脱する者を増加させてしまったことは皮肉だが、組織の変化は一方で修道女達に修道会以外の新しい社会に目覚めさせ、他方で修道会の方針への落胆を生じさせたのである。

しかし同じような状況に置かれても、役割に留まる者もいれば離脱する者もある。そこで状況に加えて重要な変数になるのが、離脱に対する重要な他者の反応である。離脱の決定は極めて個人的なものである一方、社会的コンテキストの中で行われる。疑問を抱いた人は周囲の人間に、現在の役割への不満と他の役割への参加欲求を意識的・無意識的に伝える。エバウはこれを「合図となる行動」と呼び、他者が合図に賛成すると役割離脱は促進される。逆に反対を受けると役割に留まることが多い。例えば元警官は、仕事を辞める前ミスばかり繰り返しており、友人らの助言により辞職した。反対に、元医師は、上司から奨学金や高い地位を与えられ、結果的に在職せざるを得なかった。

第一段階から次の段階に移行するまでの期間は、人によって様々で、2週間という者もいれば43年という者もいた。この長さを決定するのは、本節の冒頭で挙げたさまざまな変数が関わってくる。例えば、修道女の場合、組織のコントロールは強力なので、一度表明した意志を撤回することは難しく、修道院からの脱会は社会的に望ましくないと思われがちなことから、離脱には長い時間がかかる。

2-2. 第二段階：代替役割を探す

第一段階では、不満を抱いていても、具体的な代替役割について曖昧なイメージしか持たない。だが、第二段階における代替役割探しは意識的である。この段階においては、ほとんどの場合、現在の役割と代替役割の両方について、肯定面と否定面をかなり具体的に書き出したリストを作って比較が行われる。評価は、その役割自体への主観的な満足度や「サイドベット」を基準として行う。「サイドベット」とは、当事者の仕事以外の地位、退職金、安全、友情、世間の評価などのことで、これらが個人にとって大きな割合を占めるほど、その仕事を辞める傾向が少なくなる。

この段階では、幸福感と解放感を伴うことが多い。なぜならば、人びとはこの時はじめて自分の人生には選択する自由があると認識し、人生の大きな重荷が取り除かれたと感じるからである。決定の最終段階に近づくにつれ、案が絞られ、最も実現可能で望ましい役割に焦点が当てられる。役割の離脱を真剣に考える人は、新しい役割のもつ価値、規範、態度、期待に同一化しはじめる。これはよく知られる「社会化の先取り」と呼ばれる現象である。エバウにとって「社会化の先取り」は役割離脱過程の一部に過ぎない。それは、役割を離脱して新しい役割アイデンティティを獲得するためのステップである。個人が新しい準拠集団の価値や規範を身につけはじめると、それは元の集団の拒絶として

受け取られ、報酬が減る。その結果、その個人は新しい集団へと押し出されるのである。

興味深いのは、離脱にかかった時間が短い人には、その後の適応過程において罪悪感や後悔がつきまとうことである。彼らの場合、現状から抜け出したいという動機が勝り、先のことを考えない。その結果、離脱そのものは早くなされる。一方、離脱過程に自覚的である人は離脱に長い時間を要し、計画的であるため、その後の適応は容易になされる。

2-3 . 第三段階：ターニング・ポイント

ターニング・ポイントは、過去の一連の古い行為を中断し、その人を新しいチャンスへと起動させるような出来事である。この段階において人びとは離脱の決心を固める。ターニング・ポイントには5つの主要なタイプがある。第一は特別な出来事、第二は忍耐の限度を超える出来事、第三は制度化された・期待された時間、第四は弁解・正当性を提供する出来事、第五は二者択一の選択を迫る出来事である。

第一は、家族の死のように重要な出来事である場合と、それほど重要ではなくても象徴的な意味を持つ出来事がある。いずれにしてもその出来事は現在感じている矛盾を結晶化し、決断を導く。

第二は、役割に留まる忍耐の限度を超える出来事で、第一の特別な出来事と同様に、離脱の決断を促す。

第三は、定年や年齢制限などの、離脱についての制度化された時間や社会的に期待された時間である。本書ではレヴィンソンの言う「中年期危機（家庭や職場で責任を伴う中年期に解決困難な問題を抱えること）」（Levinson, 1978=1992）をサポートするようなデータは見つからなかった。つまり、ターニング・ポイントは必ずしも中年期に起こるとは限らないのである。

第四は、与えられた役割を去るための弁解や正当性を提供してくれるような出来事である。例えば胸部外科医は関節炎を患ったのを機に医者を辞めた。その関節炎は仕事を継続する上で支障を及ぼさなかったが、この弁解を利用することで彼は周囲の理解を得ることができ、スティグマを付与されることもなかった。

第五は、現在の状態から離脱しなければ身体的精神的健康を損なってしまうという、二者択一の選択を迫る出来事である。アルコール中毒者は、飲酒運転のために引き起こした自動車事故のようなドラマティックな出来事に遭遇することが、ターニング・ポイントになっていた。

ターニング・ポイントを機に下した離脱の最終決定は、実に様々な感情をもたらす。元修道女は抑圧からの解放感を感じると共に自由への不安も感じると言った。専門職を離れた人は自分が無意味な人物であるように感じた。しかし、ターニング・ポイントを迎えると大抵他者への決意表明を行って

いるから、決断を下した以上、もう後戻りはできない。

その後、新たな社会的アイデンティティの確立が容易になされた人は、前の役割にいる間にすでに架け橋を作り始めていた人である。架け橋は次の役割に属する仕事や人間関係のことである。例えば、離婚後の生活に適応することが早かった人には、離婚する前に既に恋人がいた。架け橋は適応を容易にする。

2-4. 第四段階：役割離脱者アイデンティティの確立

役割離脱の最終段階は、前役割と現在の役割を併合しそれに適応する段階である。最終段階における役割離脱に含まれる根本的なジレンマは、自己概念と社会的期待との間に存在する不一致と緊張である。大多数の人はこの段階において直面した問題は、6つに分類できる。

彼らのほとんどは役割が変化したことを服装や振る舞いで示すことに多くの時間とエネルギーを費やす（①自己提示）。役割離脱には、社会的に望ましいとされるものと、望ましくないものとされるものがある。望ましくないと思われるがちな性転換などの場合は、他者からスティグマが付与されるので、大きな葛藤を伴う（②社会的反応）。所属する集団によって人間関係のルールは異なるので、再度学び直す必要がある（③性的・親密な関係）。そしてつきあう人びとも変化する（④友人ネットワーク）。と同時に、元の集団ともそう簡単には離別することができず、一定のつきあいを継続する必要がある（⑤元の集団とのつき合い）。そうすると、現在と過去の集団のアイデンティティを何らかの形で両立する必要がある（⑥残余アイデンティティ）。

これらの問題には、過去・現在・未来の間の緊張が含まれている。新しい役割の中で自分を確立する過程において、過去の自己像や規範的期待などから感情的に遠ざかろうと悩む。一方、社会の人びとは前のアイデンティティに基づいた特定の役割行動を期待している。

3. 自然史的研究の意義

以上が本書のごく一部分の紹介である。本書の意義は、何よりもまず役割研究に新しい道筋を開いたところにある。離脱の経験に関する研究はこれまでもなされてきたが、相互間に関連性はなく、事例研究としての限界を有していた。一方、エバウは様々な経験的データを比較することで、離脱という現象に関して一つの体系的な過程モデルを作り出した。こうした点は、既に指摘されている（Corwall, 1989; Daniels, 1989; Ellis, 1990; San Giovanni, 1989）。しかし、ここでは本書を自然史的研究と位置づけて、その観点から捉え直してみる。

エバウ自身はこの言葉を使用していないが、本書は自然史モデルの構築を目指した自然史的研究であると言い換えることができる。自然史とは、歴史や発展を一定のパターンの契機としてモデル化する考え方である。この種の研究は数多く存在する。例えば、初期のシカゴ学派の一連のモノグラフは、社会秩序や集団の生成・変貌の過程を描いている。あらゆる生活領域での個人の社会生活やそれに伴う意識の変化を示すキャリア分析も、同等に扱うことができるだろう。他にも離婚(Vaughan, 1986)、非行(Shaw, 1931)、家庭内暴力(Walker, 1979)の研究があげられる。また構築主義の議論の中では、スペクターらが社会問題が生成し変貌していく過程を段階モデルにして描いている(Specter and Kituse, 1977)。このような研究に共通の意義として考えられる点は、一つには個々の事例研究の限界を超えることができること、二つには社会学の枠を越えて広く一般の読者にも有益な情報をもたらす点にある。

本書にはこれらの意義を見出すことができる。なぜならば、第一に、エバウは修道女以外の役割離脱者からも広くデータを収集しており、第二に、自らの役割離脱の経験により、「インサイダーとして調査し、アウトサイダーのように分析」(Merton, 1988: ix)する観察者として、対象と距離をとることも可能だったためである。ロフランドが言うように、本書は対象となる現象についての公平で信頼できる情報と分析を与えてくれており、「読者が自分自身の経験と他者の経験の理解をより一層拡大し、深めることを可能にする」(Lofland, 1995=1997:236)。エバウ自身も役割離脱を経験した人、これから離脱しようとしている人、そしてセラピーやカウンセラーなどの専門職の人びと、自助グループなどに、本書の成果が活かされることを望むと記している。

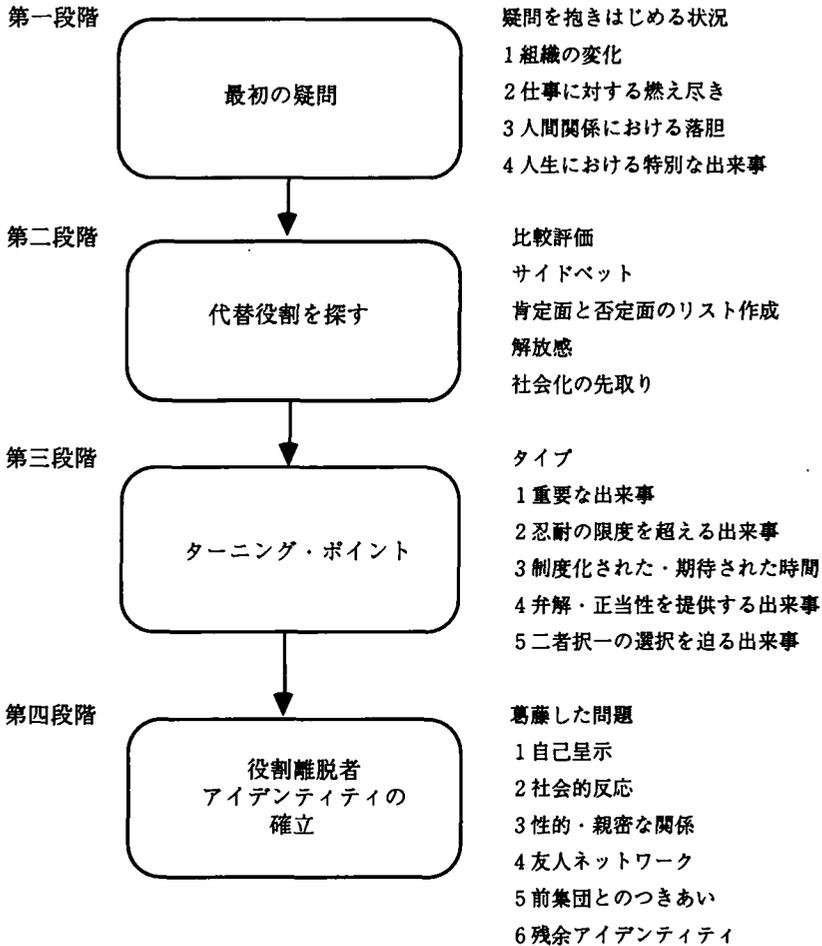
自然史的研究の問題点を指摘するならば、研究者のスタンスがあたかも全能の神のようで、ある状態がそこに「ある」ということを暗黙のうちに決定し、客観的な判断を行っているような印象を与えることである。自然史的研究は、しばしば「きれいすぎる」モデルを作り出す。理論整然としている反面、例外や反証例が故意に削除されているかのような印象を与える。このような批判を乗り越える方法として、概念が生み出される過程や調査法を意識的にそして誠実に読者に提示し、調査における照査する側とされる側の関係が不平等なものにならないよう注意を払うこと等が考えられる。エバウに関して言えば、自身自分の過去もデータの一部であると明言して自分のスタンスを開示しており、対象と観察者の立場を行ったり来たりするスタンスに立つので、ある程度批判を乗り越えているものと思われる。

本書の魅力は、エバウが私達が現代社会を生きるときにごく普通に経験する役割の離脱という経験に焦点を当て、社会のリアルな様子を描き出した点である。従来の役割研究ではどちらかという役割への適応・不適応が中心的に議論され、役割を途中でドロップアウトしてしまう人びとやその経験、感情--時に痛みや悲しみという感情の揺れを伴う--にはあまり注意を払ってこなかった。しかしよく

考えてみると、一つの役割を貫き通すことの方が、社会的に望ましいとされることが多いものの、むしろ一つの役割を全うすることの方が少ないのではないだろうか。本書がリアルな社会を描くことに成功したのは、元修道女という著者自身の経歴が大きく貢献している。エバウの業績は、役割離脱の社会学的理解を促進しただけでなく、このユニークな経歴ゆえに「力強いアイデアとヴィヴィッドなインタビューの相互作用」(Merton, 1988: ix)を生みだし、「品のいい業績など無意味だと思う読者」(Merton, 1988: ix)の関心をも惹きつけるほどの、リアルな社会と私達の経験を描き出した点において、明らかである。

現代社会は、今後更に速度を増して変化し続けるであろう。特に役割離脱の経験は以前よりもっと多く経験されるようになった。私達が見通せる将来はわずかで、未来の不確実性は増すばかりである。好むと好まざるとに関わらず、私達のアイデンティティは、常に新しい状況への対応を迫られる。その都度感情的な揺れを伴いながら、私達は新しいアイデンティティの形成を試みる。新たなアイデンティティ形成には、必ず役割離脱の過程が関わってくる。このような現代社会に生きる私達にとって、離脱概念はより一層リアリティを持ち、その視点は社会学的な重要性を増してくると言わざるを得ない。エバウの役割離脱研究が、現代を生きる私達にとって、大きな示唆を含んでいることは間違いないだろう。

図表 役割離脱の過程



各段階の性質を左右し、過程の結末を導く中心の変数

- | | |
|----------------|---------------------------|
| 1 自発性 | 7 単数の役割からの離脱か、複数の役割からの離脱か |
| 2 役割の中心性 | 8 社会的望ましさ |
| 3 取り消し可能性 | 9 制度化の程度 |
| 4 離脱にかかる時間 | 10 認識の程度 |
| 5 コントロールの程度 | 11 連続性 |
| 6 個人的離脱か集団的離脱か | |

Helen Rose Fuchs Ebaugh, *Becoming an EX: The Process of Role Exit*, Chicago Univ. Pr., 1988 (p.1-p.180) より作成

参考文献

- Corwall, Marie. 1989. Book Review: Becoming an Ex: The Process of Role Exit. *Journal for the Scientific Study of Religion*, 28:2, June, 241-242.
- Daniels, Arlene Kaplan. 1989. Review Essay: Becoming an Ex: The Process of Role Exit. *Symbolic Interaction*, 12:2, fall, 367-373.
- Ellis, Carolyn. 1990. Book Review: Becoming an Ex: The Process of Role Exit: *Social Forces*, 68:3, March, 950-951.
- Levinson, Daniel J. 1978. *The Seasons of Man's Life*. Knopf. (南博訳 1992 『ライフサイクルの心理学』講談社学術文庫)
- Lofland, J and L. Lofland. 1995. *Analyzing Social Setting*. Wadsworth. (進藤雄三、宝月誠訳 1997 『社会状況の分析』 恒星社厚生閣)
- Merton, R. K. 1988. *Forward by Robert K. Merton in Becoming an EX: The Process of Role Exit by Helen Rose Fuchs Ebaugh*, The University of Chicago Press.
- 中河伸俊 1999 『社会問題の社会学』世界思想社
- San Giovanni, Lucinda F. 1989. Book Review: Becoming an Ex: The Process of Role Exit. *American Journal of Sociology*, 95:1, July, 273-275.
- Shaw, Clifford R. 1931. *The Natural History of a Delinquent Career*. Albert Saifer.
- Specter, M. B. and J. I. Kistuse. 1977. *Constructing Social Problems*. Community Publishing Company. (村上直之、中河伸俊、鮎川潤、森俊太訳 1992 『社会問題の構築』マルジュ社)
- Vaughan, Diana. 1986. *Uncoupling: Turning Points in Intimate Relationships*, Oxford University Press.
- Walker, Lenore E. A. 1979. *The Battered Women*. Harper & Row. (穂積由利子訳 1997 『バタード・ウーマン』)

(みずの えり・修士課程)